

所を、切り捨て、生るべし、但水深き、花器を好みなり。

是でお約束だけの、お話を、終りました、そこでまた／＼御紹介致したい、物が御座いますが、夫は、奥傳としては、河骨水揚法、同壳生の傳とか結び南天の傳とか、時雨柳又は露落し柳の傳、或は、蓮水揚法、或は竹壳生の傳、割れ竹水揚法

など申す種類で、幼稚園、或は幼兒本位の目的には不要と存じますし、旁々貴重な誌上を、下らぬ長話で、埋める事も甚だ心苦しく存じますので此度は之にて、筆を止める事と致します、後日誌上にお明きが、御座いましたらば、今數種花物を御紹介致したいと存じます。

緑の家

若き父

腸の病
色鉛筆の主人公であつた坊やは、讀者諸君の御存じの如く、否、讀者諸君よりも執筆者の若き父と校閲者の若き母とが、最も良く知つて居る通り其當時は一年と九ヶ月であつた。其後坊やのお家は二度變つた。

坊やの一家は先づ八月の二十八日に郊外の代々木に引越した。其理由は次の通りである。坊やは四月（一年と五ヶ月の時）に牛乳をコンデンスに代へた時から腸を悪くして、次第に瘦せて、且つ非常に氣むつかしく成つて、いろ／＼氣を附けても手を盡しても、中々急に癒らなかつた爲め

に、八月の初めに小兒科の先生の御説に従つて、二週間程大森に轉地して見た。

變化ある海や空や野原の眺めや、汽車や電車の絶え間なき活動などが、坊やの鬱した氣を晴らし氣分を軽く穩やかにする上に、非常によい結果を示して來た。其時さし當つて、腹に著しい愈り目が見えなかつたけれども、もう少しこの生活を續けたら必ず良いに相違ないと云ふ大體の見極めが付いたので、いよいよ郊外生活と決定して東京へ引揚げた。これから一週間程で家をさがしたり荷物をまとめたりして、八月の二十八日に代々木へ來た。色鉛筆はこの間の記事であつた。

子供の腸の病氣に經驗のある方は、いくら軽のでも、そんな緩慢な大袈裟な療治をするよりも、ヒマシ油を飲ませて少し斷食させて、それからタニンゲンでもやつたらと御思ひになるかも知れないけれども、これは身體的存在としての子供を、見るに急で、精神的存在としての子供を輕んじた考へ方であると思ふ。尤も重い場合には全く問題が違ひ、かういふ治療より致方がないからこの場合は別とする。成る程斷食療法は手取り早く癒る事は癒るけれども、生んとする盲目的の努力、個體の生存を保つ爲めの營養本能の猛烈なる活動は、坊やの全存在を驅つて食物の爲めに物狂はしき極みまでに動亂させる。呼氣も血も盡く燃えて求め盡した恨めしげな眼から小さい水晶の蛇のやうな涙が流れ、身をもだえ手をわなゝかせて泣きさけぶ。やがて號泣が呻吟となり、呻吟が昏睡となつて、傍で見て居る人々は坊やが今度醒めて泣くまでのしばしの間丈け、ほつと休息の息をつく。同情のあつい父や、氣の弱い母には中々出來ない療法である。單にかかる一日二日の斷食のみならず、なべて病氣と云ふものが、今出來かけて居る坊やの感情や意志の生活の基礎たるべき質

なり性格なりの萌芽と云ふやうなもの、上に及ばず害毒はどんなに甚しいものであらう。これは單に思想の上の論ではない。坊やに就いて親しく経験してからの自分の確信である。

扱て坊やのお家はいよ／＼代々木で見つかった時、左の方の御料地のあたりを見下ろした處に、山の手線ならば原宿から代々木へ来る時、やはり左の方の御料地の邊りを眺めた處に、誰れでも赤いやうな屋根で緑色に塗つた平屋を見る。自分の知つて居る或る學者はこれを緑の家と呼んで居るさうである。代々木の夏から秋の暮れにかけての坊やを中心とした緑の家の興味ある生活は、中々筆にも書き盡されない程、深い明るい、にぎやかな、又しんみりした味があつた。十二月に入つたら夜分に成ると隙を漏る風が餘り寒いために坊やに風をひかせたので、暮の二十八日に代々木

の他の處へ再び引越した。それから緑の家に於ける重な出来事を少し書いて見やうと思ふ。

おもり過去の苦しい愛らしい経験を、努力を以て追想の世界にはるぐと換び戻して、自分の前に取り出して兎見角見して、其當時親しく経験した身體的の感覺が、もう一度實現するきわまでも、これを精しく濃かに深く味はつて見やうと思ふ事がよく自分にある。例へば坊やをお守した時の経験の如きである。しかしこの試みは中々困難である。むしろ不可能である。現在の意識に上つて来る経験は、強さから云つても、續く時間から云つても又其の性質から云つても、もとの感覺とは似ても似つかぬ、淡い短い種類の變つたしかも幽遠な美しい感情の彩りのついた觀念である。感覺のおもりと追想のおもりとは截然たる區別がある。しかし追想をたどつてこれを記述して見たい。

代々木へ越した日から、坊やの氣をまぎらす爲めにトーチヤンはよく坊やをおんぶして、朝となく夕となく、彼方此方を散歩した。もとより子守のやうに兵兒帶でしばり付けられもしないから、背中に深くまはして組んだ両手と、腰を少し曲げて作つた背中の斜面とで、坊やの體を支へる丈けである。緑の野原に白く輝いて居る代々木の踏み切りの柵を越えて、一本路をだら／＼と降つて、又少し登ると千駄谷の檜の林がある。これを斜に通つて右に曲つて少し行けば、牧野さんの向側に鳥屋があつて、鳩、鶴、家鳴、小鳥などを多く飼つてある。坊や及び其の保護者に取つて公開の、この私立小動物園は、さし當つて坊やの第一の遊覽場でなければならぬ。お守りをする人は、坊やが満足するまでこの前に立つて、この事件に關しての四つか五つの坊やの語彙を用ひて會話を交換し乍ら、鳥を觀る悦びを坊やと共に分かたなけ

ればならぬ。この時分は丁度内閣が代つた時で、新しく農商務大臣になられた牧野さんの門前は、狭い千駄谷の通路に、自動車や馬車や人力車が入り亂れて、禮服を着た人で込み合つて居る中を、かけたか知れぬ。

坊やは鳥の見物に興がついて來れば、馬上ゆたかと云ふ意氣で、足を動かして空鎧を踏ん張り乍ら、「オーチ／＼」と綠の家の方角を指して示す。トーチヤンは仰せに従つて、これから坊やを乗せたまゝ、復家に歸らなければならぬ。公開私立小動物園に來る時は、肩や脇や手首の關節も腱も、又腕全體の筋肉も、活動の餘力が溢れて居た爲めに、坊やを樂に背中の上部に支へる事が出来て、從つてかなり腰をのばしたまゝで、悠々と坊やを背中に乗せて居る事が出來た。しかし歸り路に成

つて來ると、腕が疲れて追々坊やがすり下つて來るので、重心の移動に伴つて勢ひ腰を曲げてこの調和を保つて行かなければならぬ。加之出發の時から三十分餘も曲つたなりであるから、腰は既に異様なる痛みを感じつゝ、腰の關節と其附近の筋肉の緊張抵抗等の作用が次第々に減却して來るので、益々腰が曲つて來る。こゝに面白いのは客観的には角度を以て測定し得べき實際の腰の曲折は、重心の移動と腰の疲勞との爲めに、身體の位置の感覺に錯感を生じて、主觀的には尙自分は直立して居ると云ふ感覺を生ぜしめる。從つて痛い腰を休める爲めに、少し腰を伸ばして直立しやうとすれば、自分はひつくり返つてしまふやうな感じがして、必ず坊やは轉覆するに違ひないと云ふ恐るべき豫想を生ずる。第一に轉覆を防ぐ爲めには、背中の斜面の傾斜を愈々甚しくして、痛い腰を益々曲げるか。第二に轉覆と腰の曲折とを防

くには、胸を前に張り出し、身體の後部を後に突き出させて、丁度體を燕尾服を着たポンチ繪のやうな格好にするか、さうでなければ第三に最良の方法として勞れた兩腕に死物狂ひの力を復活させて時々坊やの體をゆり上げて、全體の重心を成るべく上に持つて來て、主として兩腕の力に信頼して出發當時の姿勢と態度とを再現するかである。取り敢へず第三の方法を採用して、踏切りまで來るうちに九回までもこの重心の移動を試みて、坊やをすり上げる。

勞れを休め乍ら踏切りの番人と話ををして居るうちに、あまり溫和すぎると思つて居た坊やは、何時となしに脊中で寝入つてしまつて、今度坊やの體は流動體的にいやに取扱ひにくく、重く成つて来る。何故かと云ふに燕尾服式も重心移動法も、寝入つて身體の調節作用を失つて居る坊やに取つては極めて危險であるから、勢ひ腰曲げ法を一層甚

しく行つて、ゴニヤ／＼に成つた坊やを背中の上で十分安全に保護してやらなければならぬ。加之一旦坊やが寝入つたと云ふ事實が明瞭に意識に上れば、腕や腰の苦痛の感じが神經をえぐつて、脳に焼き付くやうに鋭く深くしみ徹つて肩や肱や手首の關節は、一寸／＼づ、次第に伸びて弛んで行つて、外れさうに成つて、其のあたりの血液は青白く變色して、腰の筋肉の一粒／＼の細胞は、ひしやげて、押しつぶされて、絶え／＼に苦の脳の聲をあげて居るらしく感せられる。やがて息も絶え／＼に成つて綠の家につくと、直ぐに玄関でアーチヤンを呼んで坊やを取り外して貰ふ。かう云ふ身體的の苦痛のつゝいて居る間、自分は人生の務めの大部分を果したと云ふ自信を持つのを常とした。

ブン／＼バ

坊やのお家は御料地に接した高い原の上にあつ

て、裏木戸をあけるとすぐこの原である。十五夜の月見がすんでから、百舌の聲が一しきり鋭くなり、向ふの檜の林の梢も、葉の色の眺めが、枝の線の面白さに變つて来る頃になれば、快いピアノの音のやうな仲秋の風が午後の日の光を浴びた原の枯草をなびかせて、御料地の林を越えて遠くの薄の原の方までも吹いて行く。緑の家の人々は總がかりで薄縁や花筵や座蒲團を枯草の上に敷いてお茶やお菓子を運んだりして、扱てブン／＼バを揚げる。ブン／＼バとは廐の事である。ヅボンボと云ふ徳川時代の玩具がある、これを坊やはブン／＼バと發音する。廐は一寸見た所でヅボンボに似て居るから、やはりブン／＼バである。北海道の長い／＼冬の間に鍛へ上げたと、よく冬の話の出る折にトーチヤンが自稱しつゝあつたブン／＼バの手並は、今半紙二枚ばかりの廐の、糸目のくばり、重さの平均、仰俯の角度、揚げてからの早

たぐり、逆おとし、左右水平の飛行は云ふも更
らなり、右の手殊に人さし指の使ひ分けによつて
ブン／＼バは最早や坊やの玩具ではなしに、全く
大人の遊びに供される。一と通りを教授してから
トーチヤンは遠くの小高い丘の上に立つて、全局
の光景を見渡して居る。蓋しアーチヤンとババチ
ヤンに取つては、凧を揚げると云ふことは、生れ
てから初めての経験である。光を一ぱいに含んだ
秋の空をまぶしさうに見上げて、金色の網をかけ
たやうな青空を背景にして見て、今更乍ら花やか
な凧の色と、空の色との配合の美しさに驚いて、
代々／＼に糸を取り合つて、我を忘れてブン／＼
バを揚げて居る。この姉妹二人の遊戯の活潑さは
的にしとやかに成る。蓋しブン／＼バは主として
意思の作用範圍に屬すべき玩具で、自我の感情の

無碍自在なる發展、努力の感じ、活動の感情、目
と手との調和を統一する複雑なる反應、凧の微細
なる位置方向、経路速度の變化に反應し對抗し之れ
を制御する手と指との反應時間の早さなどをト
ーチヤンは考へて居乍ら、暫時閑却されて居た注意
を再び坊やに換び返へす。

ジンジンチャヤン
トーチヤンの膝の上に抱かれ乍ら、夕飯の出来
るのを待つて居た坊やは、とう／＼眼つてしまつ
た。外には青暗い霧がいつとなく緑の家のあたり
に忍んで来て、今しめたばかりのガラス戸から漏
れて逃げて行く電燈の光を、ひた／＼と吸ひ盡く
し呑みつくしてしまふので、家の中はいつになく
寒く且つ暗い、坊やのお粥をかけてある長火鉢の
火も、電燈に照らされた新しい障子も、目を開いて
眠つて居るやうな白らけた光を帶びて居る。坊
やの眠りをさますまいとして、お話をひかへて居

るアーチャンとババチヤンの頭は自ら低く垂れて、云ひ合せたやうに暮れて行く秋の夕べの淋しさをやる瀬なく痛切に味つて居るらしい。この時ゆるイラツバの音がかすかに遠い／國から流れ来るやうに響いて又絶えて又聞える、初めの音を淋しい心の奥に深く入れた後で次の音が来て、この音を心行く限り味つてから又第三の音がゆる／と来る。五音、六音、七音と長く續いて、それつ切り聞えなくなる。聞いて居る人の靜脈を流れ行く血が、次第／＼に水銀のやうに重く沈んで脈管の底にきり／＼と痛がゆいやうに触れて、ガラスを細かく震はせたラツバの音の反響と共鳴して居るやうな心地がする。

「い、事！」
「淋しい事！」
と一緒に云つて、知らず／＼立つて戸まで進んだアーチャンとババチヤンの視線は、手で幕か何かを拂ひのけるやうにガラス越しに、立ちこめた霧の奥を深くさぐり乍

ら、ラツバのする方をのぞき込む。代々木は青山の兵營にあまり遠くないからである。若し坊やが起きて居たら、切れ／＼に成つた圓の弧のやうな短い曲線的運動をしながら「ジンジンチヤン、ヅツヅツ」と云つて、この寂寞な光景を美しく滑稽化する事もあるだらうと思つて、自分は今はしなく子供を失つた父と母との秋の夕べの悲しさをしみ／＼と味ふことが出来た。

しかし悲しいのは夕暮のラツバのみではない。代々木は軍人の住宅の多い土地である。嘗つて鳥羽沖に沈没した春雨の艇長大瀧少佐の葬式があつて、行列が代々木から青山の斎場まで進んで行く途中、坊やは白く塗つた踏み切の柵を越えて、千駄谷の檜の林の中で、この一行を見物したことがある。